

	¹⁹⁸ Au colloid		^{99m} Tc Scolloid			
cpm per mg of bone marrow	50Å	200~ 500Å	メーカー A	メーカー B	メーカー C	骨髓用
cpm per mg of liver	0.248 ±0.082	0.366 ±0.089	0.923 ±0.314	0.447 ±0.233	1.696 ±0.208	1.725 ±0.569

骨髓用に調製したコロイド粒子の大きさは、 0.4μ 前後で $\pm 0.1\mu$ の範囲に80%を認めた。また75% MeOH を展開剤として paper chromatography を行なうと原点に99%以上の activity を認めた。更にシンチカメラの Data-store play-back 装置を用い、persistence scope 上に心と脾に area を設定し人体での R.E.S. への摂取曲線を求めると静注15分後にプラトーを認めた。椎体を1つつ separate して描出しえたが肝への摂取がまだ多く、今後コロイド粒子の大きさよりも物理化学的性状に重点をおき検索したく思っている。

質問： 斉藤 宏 (名古屋大学 放射線部)

²⁰³Hg-MHP で骨髓が描出されたのは大変興味ある所見ですが、骨髓内であることを確認なさいましたか？
小生もおそらく骨髓内とは思いますが。

*

17. ^{99m}Tc-S colloid を用いた骨髓シンチフォト

高田 勝利

(名古屋市立大学 第2内科)

藤田 卓造 井本興夫

(名古屋市立大学 放射線科 R I 研究室)

われわれも今回症例にヘキスト社のヘマセルを用いたキットにて、^{99m}Tc-S Colloid を作製し、骨髓シンチグラムを施行した。今回われわれが目的とする所は、血液疾患の骨髓スキャン像を、Scintillation Camera で追跡する際、できた像の鮮明度のみで比較するには、限界があるので、何んらかの一定の条件での撮影、定量化を試みた。すなわち一定の調製法、一定投与量、一定注射時間よりの撮影、一定部位、一定露出 cpm を選び、各部位の露出時間を比較した所、骨髓描出の鮮明度と露出時間がよく相関し、写真上変化のない像に対してもよくその病態を表現した。これらの事実は写真上の肉眼的判断と同程度、またはそれ以上に骨髓スキャン像の判定に役立つと考えられ、更に骨髓造血能における骨髓網内系の役割りについて、症例を重ね追求する。

質問： 今村 孟義

(岐阜大学放射線科)

Rabbit を用いた実験例では

使用されたメーカー製のコロイドはあまり骨髓に入らなかったのでしたので骨髓用コロイドを開発された方がよいと思います。

スライドで上肢、下肢の描出は骨髓ではなく末梢血液内 RI のように思えますが如何ですか。

質問： 斉藤 宏 (名古屋大学 放射線科)

RE の機能は肝機能に左右されますが、肝機能変化例では、コロイドの消失時間がvari シンチフォトを描出するまでの時間も変わってくると思います。血清中フロイド消失率 (T_{1/2}) は如何でしたか？

骨髓機能のうち造血能と RE の機能とは必ずしも一致しないのですが Biopsy 上何か新知見がえられましたでしょうか。

答： 高田 勝利 (名古屋市立大学 第2内科)

下肢像等のシンチフォトの出現はある程度血中の Radioactivity を見ている可能性もありますが、種々の例で露出時間の差が出てくるのはやはり骨髓に取り込まれたものを表わしていると考えられます。

Tc-S-Colloid の disappearane curve は、15分で一定になりましたが T_{1/2} について正確には行っていません。

*

18. 甲状腺機能亢進症に対する ¹³¹I 適正治療量について

小野田孝治

(国立東静岡病院 放射線科)

昭和41~45年に ¹³¹I により治療された甲状腺機能亢進症164例中、治療後の経過が充分観察できた100例をえらび、適正治療量を検討した。

治療量は甲状腺重量 1g 当り 70~140 μ Ci を基準とし、病状、年齢などを加味して適宜増減した。1回の投与で終わったもの66例、2回22例、3回以上12例、1年~1.5年後著効を認めたものは75例(1回投与では48例、2回18例、3回以上9例)。一時的に機能低下を示したものは10例、未治15例(再発を含む)。

適正 ¹³¹I 量は1回投与では 70~150 μ Ci/g (平均 116 μ Ci/g)、2回投与では 110~190 (平均160)、3回以上で